歴史の足跡

北海道医学教育史年表 (5)

札幌市医師会　小 竹 英 夫

大正8年（1919）の続き

2．7　勅令第13号を以て、帝国大学令を改正し、各分科は各学部となる。

4．1　北海道帝国大学に医学部を新設し、在来の農科大学を農学部と改称。

4．11　医師法第3次改正。医師会は法人格を与えられ、官公立病院勤務医も加入の義務を生ず。

4．16　大学入学志願者の増加に伴い、旧制高校の増設が認められ、所謂ナンバースクールの外に地名を冠した官立高校設立され、本年は新潟・松本・山口・松山が新設される。大正12年（1923）までに計17校に及ぶ。うち東京高校は官立唯一の7年制。

5．23　高等教育機関拡張審議のため、臨時教育委員会を文部大臣の監督下に設置。

9．一　北大予科ドイツ語学級生徒80名入学（のちの医学部第1期生）。

予科ドイツ語学級修了者は、昭和28年卒業の第29期までが、医学部に無条件進学。

太平洋戦争中、予科は学年が1年短縮されていたが、昭和21年旧に復し3年となり、学部進入者がなく、旧軍学校出身者、外地大学よりの転入者を採用し、定員を充した。

9．25　医師会令施行（勅令）。設立総会にて設立を決議し、設立委員は会則を添えて、許可を地方長官に申請することとなる。

大正9年（1920）

6．一　大正6年から起工の北大医学部の解剖学、法医学教室及び事務棟が落成。

大正10年（1921）

4．1　全官立大学・高等学校、4月を学年開始期日とする。従来は9月。

4．22　北海道帝国大学官制を改正し、医学部に附属医院を設置（勅令第18号）。

北大医学部に、解剖学・生理学・医化学・病理学の6講座が設けられる（勅令第119号）。

5．17　秦　勉造、北大医学部初代学長に補せらる。

11．1　北大医学部附属医院開院式。

11．2　診療開始（内科・外科・産婦人科）。

大正11年（1922）

3．17　北海道帝国大学医学部、学則を制定し、**4．1**より施行。

4．23　北大医学部授業開始（文部省令第26号）。

5．一　北大医学部に、解剖学第2・同第3・生理学第2・病理学第2・細菌学・耳鼻咽喉科学、薬物学・眼科学の8講座を置く（勅令第265号）。

大正12年（1923）

5．一　北大医学部に、産婦人科学・小児科学・皮膚泌尿器科学・法医学・内科学第2・外科学第2の6講座置かれる（勅令第245号）。

大正13年（1924）

5．一　北大医学部に、精神病学・衛生学・内科学第3の3講座置かれる（勅令第163号）。

大正14年（1925）

4．13　陸軍現役将校配属令公布。

陸軍近代化装備のため、高田・豊橋・岡山・久留米の4個師団の廃止と各師団の歩兵連隊の第4・第8・第12中隊の抜去が**5.1**公示され（所謂

宇垣軍縮)、それによって現役陸軍将校（約2,000名）は職を失うこととなった。その救済策として、中等学校以上の男子校に、現役将校が配属されることとなった。

しかし救済策としてのみでなく、学生・生徒に軍事教練を施し、学校教練に合格しないと、入隊しても幹部候補生の受験資格が与えられぬことから、支那事変以後の配属将校の学内での権力は強大であった。

師団廃止により軍事予算が節減された訳ではなく、それは第一次世界大戦で威力を認められた戦車隊と航空兵科の新増設、重機関銃隊・自動車隊の増設、歩兵中隊への軽機関銃装備、無線通信の改良などに用いられ、軍事費の総額には殆ど変化がなかった。

5．一　北大医学部に外科学第3講座が置かれる（勅令第197号）。

大正15年（1926）

5．14　北海道帝国大学、明治9年（1876）前身の札幌農学校開校以来50年を経、創基50年記念祝典を挙行。

同時に関東大震災により、中止となっていた医学部開学式を挙行。今医学部長、開学報告を述べる。

11.一　改造社、1冊1円の『現代日本文学全集』(全63巻）の予約出版の刊行開始。以後、出版界は円本ブームとなり、3百数十種の円本全集刊行さる。

昭和2年（1927）

3．15　東京渡辺銀行破綻。連鎖状に全国的に中小銀行の取り付け騒ぎ（昭和金融恐慌)。

4．22　3週間のモラトリアム（緊急支払猶予令）公布、即日施行（緊急勅令)。

4．22〜23　全国銀行一斉休業。

5．13　モラトリアム期限満了後第1日。市場平穏に終始。

7．5　岩波書店、岩波文庫創刊。書店主岩波茂雄は､｢読書子に寄す」と題して「真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む」に始まる長文の発刊の辞を発表した。執筆者は三木　清とされる。

それによると、前年からの円本全集の大量出版物の「流行」は、「唯広告と宣伝とに力を専らにし、其内容に至っては遺憾乍ら到底真面目なる人々の渇望を満足するに足らず」とした。そして予約の手段で読者を制限し、読者を繋縛すると非難した。しかし、円本全集のなかには、立派なものも少なくなかった。

予約出版は、申込と共に全巻講読を予約し、予約金の壱円は最終巻に充当するとした。従って申込者が30万なり40万あると、その予約金30万円か40万円は出版社の手持金として、社内に保留されるのである。そして読者は、出版の度に1円を支払って本を手中にすることができる仕組になっていた。月1冊の配本。

当時の万という金は、現今からは想像も及ばない多額の金額で、昭和初頭の不景気を乗り切る絶好の財源となったのである。

岩波文庫のシステムは、ドイツのレクラム文庫を範とし、東西古今の古典籍を自由に、欲する時点で購求することとし、約百頁を単位として星ひとつを以て現し、その★ひとつ毎に20銭の安価なものであった。

第1回の出版は､｢万葉集」、漱石の「こころ」、カントの「実践理性批判」など23点。

昭和3年（1928）

2．20　初の普通選挙による総選挙（但し有権者は満25歳以上の男子のみ)。

昭和5年（1930）

4．22　ロンドン（海軍軍縮）条約に調印。

'31．1．1公布

昭和6年（1931）

9．18　満州事変勃発（これより15年戦争)。